

### 3. リスク基盤の避難安全検証法の手続き

今回提案する‘リスク基盤の避難安全検証法’の前提や検証の手続きは 2 節に記述した現行の性能的避難安全検証と基本的に同じである。若干の違いは、下記の点に纏められる。すなわち、‘リスク基盤の避難安全検証法’では

- (a) 出火空間の規模、用途に伴う出火率、および避難対象人数に基づいて、許容避難リスクを決定し、その許容避難リスクが満足されることを検証するために必要な設計火源を定める（注 3.1）。
- (b) 防火扉、スプリンクラー（SP）、排煙設備等の作動/不作動によるイベント分岐によって検証が必要な避難シナリオを抽出する（注 3.2）。

なお、許容避難リスクおよび設計火源を定める上で必要となるデータベースはわが国における火災統計データなどを使用して構築する。

こうして、設計火源と避難シナリオが決定された後は、現行の避難安全検証法と同じ手続きに沿って検証作業を行う（注 3.3）。

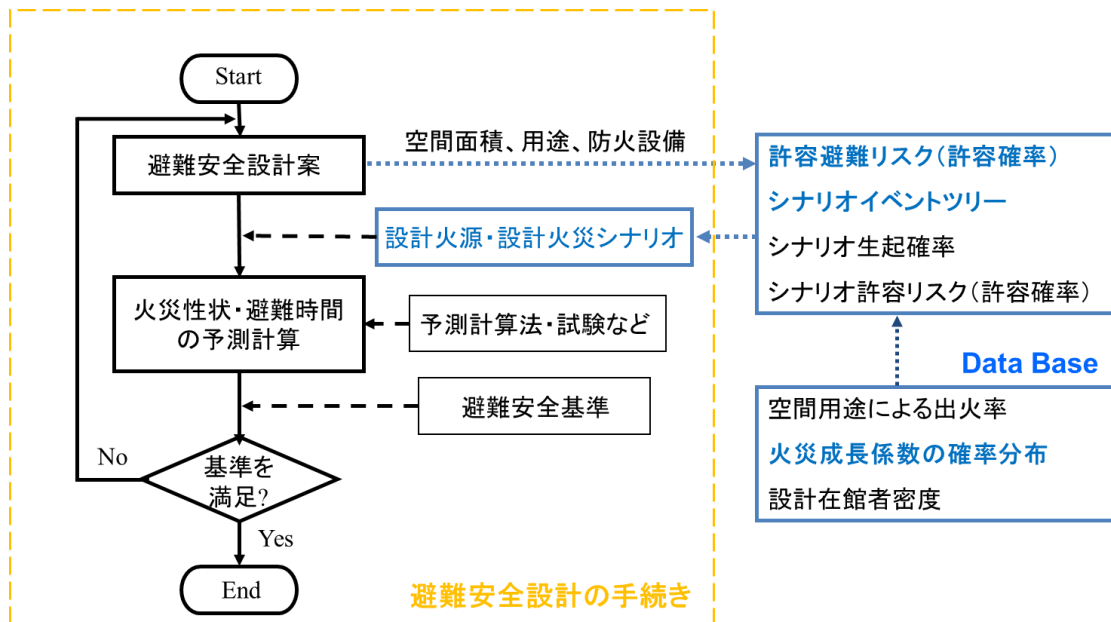


図 3.1 リスク基盤の避難安全検証法の枠組み

(注 3.1) 現行の避難安全検証における設計火源では、その下での避難設計が不十分なのか過剰なのか評価出来ない。

(注 3.2) 避難設計には種々のシナリオが関係する。どのようなシナリオまで考えるべきかが頻繁に問題となるが、各人ごとの主観によって意見がかなり分かれる。どこまで考慮するかによって設計への影響が変わるので、ある程度共通の合意が得られるようにするためにはシナリオ選択のガイドラインとなるような何らかの指標が必要である。なお、ここでは火災シナリオを確率的に取り扱い、避難シナリオは確率的に取り扱っていない。

(注 3.3) 予測計算法、避難安全基準は、現行のままとする。但し、改善の余地は多々あると思われる。